

2207 離島覚書（鹿児島県・与路島）



沖縄に向かう航空機から撮影した与路島と請島、加計呂麻島

令和4年7月9日

古仁屋

与路島は奄美大島の南にある加計呂麻島のさらに南に位置する。与路島の隣には請島が並ぶ。今回の島旅はこの2島が対象だ。

与路島へは奄美大島の南端の町・古仁屋から町営の定期船が通っている。基本的に1日1往復で、日曜日のみ日帰りが可能であるが、その他の曜日は島に泊まらなければならない。新型コロナの影響で、島の民宿はどこも客を受け入れていなかったため、与路島、請島への島旅は実現していなかった。6月に入ってコロナの新規感染者数が減り、島の民宿が受け入れを開始したことから、早速、訪問することにしたのである。

古仁屋に前泊し、翌日の船で与路島に渡ることにした。古仁屋は奄美大島の名瀬に次ぐ第2の都市で、戦時中にたくさんの軍事施設が置かれた軍都である。現在は加計呂麻島、与路島、請島と本島の大島海峡側を包括する瀬戸内町の中心地となっている。

奄美大島に来るのは、①水産庁から受託した漁村における環境保全活動の調査、②喜界島を訪問した帰り、航空機が欠航となり奄美大島経由で帰った時、③加計呂麻島の離島調査、の計3回来ているので、今回は4回目になる。

羽田空港からJALの直行便で奄美大島空港に到着。飛行機が15分ほど遅れたため名瀬行のバスは出た後だった。1時間ほど待って、15時45分発の「しまバス」に乗り、古仁屋に直行する。

途中、本花トンネルの手前から滝のような雨になる。トンネルを抜けると雨はやんだ。奄

美大島は山が多い。したがってトンネルも多い。和光トンネルと抜けると、奄美大島の中心地・名瀬の市街地になる。名瀬は山に囲まれている町だ。そのせいか、気象変動が激しいのだろう。しまバスの本社で5分ほどのトイレ休憩の後、古仁屋に向かう。始発から終着まで乗ったのは私のみだった。所要時間は3時間弱、少々古いバスには観光客はおらず、高齢者や学生が目立った。

古仁屋にはホテルが3軒あるが、そのうちの2軒は満室で、最も古い「ビジネスホテルプラザせとうち」に空き室があったので予約していた。

ホテルから紹介された飲食店に行くが、2店ともに満席。街中を歩き、島料理リッキという店に入る。島料理というから水産物を想像していたが、期待に反し豚肉やその内臓の料理がメインで海産物は少ない。ブダイの唐揚げを注文し、生ビール1杯と黒糖焼酎の「朝日」のロックを飲む。

令和4年7月10日

町営定期船せとなみ

7時30分にホテルの食堂で朝食を食べる。朝食は飯①、納豆、マグロ焼き、豆腐、スパゲティであった。

チェックアウト後、与路島、請島に行く船が出る「せとうち海の駅」を下見する。ホテルから5分ほどで着いた。船は10時に出発するので時間があつた。「瀬戸内町史」を閲覧するため徒歩で瀬戸内町役場に行く。日曜日であつたが職員がいた。しかし町史の所在がわからない。職員の方が町立図書館に電話を入れてくれて、町史は図書館で売っているという。すぐに図書館まで歩いた。町史は2編に分かれていて、歴史編はあまり参考になるところがなく、もう1編は売り切れになっていた。しかなしに再び歩いて海の駅まで戻るが、約40分を要した。高温と高湿度が重なる1年のなかで最も不快な時期で、上半身は汗でびしょ濡れになった。

与路島には商店も自動販売機もないと聞いていたので、港の近くにあるAコープで天麩羅弁当とお茶を購入した。

「せとうち海の駅」からは加計呂麻島行のフェリーと与路島・請島行の町営定期船「せとなみ」が発着している。海の駅内には瀬戸内町の観光協会や古仁屋漁協が運営する直売所などが置かれている。



定期船が発着するせとうち海の駅（左）、町営定期船せとなみ（右）

10時発の町営船「せとなみ」に乗り、与路島へ向かう。古仁屋から18人が乗船した。船内はカーペットを敷いた座敷があるだけで、椅子席はなく、座敷の片隅にソファが2組置かれていた。ここは4人ほどしか座れない。船内でランニングとTシャツを着替え、びしょ濡れになった衣類をハンガーにかけて乾かす。

「せとなみ」は加計呂麻島との間の大島海峡を抜け、請島を経由して、最終停泊地の与路島に向かう。請島では請阿室と池地の2つの港を経由し、11時40分に与路島に着いた。港に置かれている船客待合室の外壁には「いーおーちゃーどー」（よくいらっしやいましたという意味）と書かれていた。数人の子供を連れた若い女性も一緒に降りた。

港には「民宿みどり」の女将が迎えにきていた。同宿者は世利さんというIT関係の仕事をしている若い人。休暇をとって全国の島を周っているとのことだ。彼は古仁屋でバイク借りてきたようで、船からそのバイクが降ろされた。ご主人の耕耘機の荷台にバックパックを乗せ、歩いて民宿に向かう。5分ほどで到着した。

宿の居間で購入してきた弁当を食べ、冷たい麦茶をいただいた。昼食後、すぐに集落に出て、歩き回る。

与路の集落

与路島は面積 9.35 km²、周囲 18.4 kmの南北に細い島で、奄美群島の有人離島の中では最も小さい。島の東海岸の中央からやや北の位置に集落が形成されている。集落の背後には農地が広がるが、それ以外は森林で覆われ、森林面積は島の9割に及ぶ。

1908（明治41）年に大島郡鎮西村（加計呂麻島の南部半分と与路島、請島で構成）の一部となり、戦後の米軍施政権下を経て、1953（昭和28）年に日本に復帰し、1956（昭和31）年に鎮西村、西方村、古仁屋町、実久村の合併によって瀬戸内町となり、現在に至る。2020（令和2）年国勢調査時の人口は84人、世帯数は52戸であった。民宿のご主人は水道メーターの検針をしているので、島の世帯数を正確に把握している。彼によると実際に島に住む世帯は47戸というから、国勢調査時よりも5戸減っていることになる。このうち夫婦で住むのは8戸ほどで、残りは単身世帯とのことだ。ちなみに与路島の水道は簡易水道で、山からの湧水を活用している。

与路島の人口のピークは1950（昭和25）年の1,348人、世帯数は270戸であったが、その後一方的に人口も世帯数も減少し、ピーク時に較べると人口は1/16、世帯数は1/5となっている。

港から上がってきた正面に与路島の人々の墓地があった。しかし、この間の世帯数の減少で、島を出た先に墓を移した家が多いようで、墓地の1/3ほどは改葬されていた。そして雑草で覆われ、しばらく、墓参した形跡は見られないところが多い。

集落の中心部に与路へき地診療所と郵便局、公民館、そして土俵が置かれている。この一角に国土交通省の「島の宝百景」に認定されたことを記念した「珊瑚石垣修復記念碑」、与路青年団が昭和29年8月に設置した「祖国復帰記念の鐘」、「与路出身戦没者銘碑」などが建つ。戦没者は67名に及び、ほとんどが20歳代であった。小さな島にとって若い男子の喪失は大きな痛手になったに違いない。

道で出会った人に「集落を見渡せる場所はないか」と訪ねると、どうも島の人ではなかつ

たようで、近くの家に案内してくれた。横浜市港北区に住んでいて、里帰りしているという男性が高台に登る道を教えてくれた。おまけに親切にも「喉が渴いているだろう」からといって、別の家の冷蔵庫から缶ビールを出してきてくれた。お金を払おうとしたがいらないという。彼によると多い時には1,000以上の人が与路島に住んでいたという。1956（昭和31）年に鎮西村と他の3町村が合併した時の人口は996人だったといい、変わり果てた島の現状を嘆いておられた。

教えてもらった集落南側への道を進む。海岸道路から山道に入り、急な坂道を登る。道路の上には蜘蛛の巣が多く張られていた。髪の毛に蜘蛛の糸が絡みついたため、道端の枯れ木を拾った払いながら進んだ。しばらく登ったヘアピンカーブのところが、木が伐採され、草も刈られており、眺望が効いた。この小高い丘から集落の写真を撮る。

冬季の偏西風は山があって避けられるが、台風時には海が相当荒れるようで、2重3重に消波堤が設置され、その背後に砂浜、防波堤、海岸道路と続く。集落の間にはアダンを主体とした樹木のグリーンベルトがあり、道を挟んでその背後に集落が形成されている。集落から一段低い位置に農地が広がり、山際まで続く。トタン葺きの家が多いが、中にはRC2階建ての家も見られる。ちなみに与路島の民家は1945（昭和20）年の米軍による空襲でほとんどが全焼しているため、現在の家はその後に建てられたものである。

集落は中央から北側が^{かねく}金久、南側が^{さとほ}里方の2つの字に区分されている。



公民館と土俵（左）、与路集落の全景（右）

ハミヤ島

与路港の東側にハミヤ島が横たわる。かなり印象的な島で、集落を一望できる展望台の右側にはっきりと見ることができる。港から2kmほど離れているだろうか。白い砂が山の斜面に吹き上げられているように見える。面積0.13km²の無人島で、この島にはハブは生息していない。ハブはイノシシのように海を泳いで渡ることはないのだろう。

砂浜はウミガメの産卵場になっている。地



展望所からみたハミヤ島の全景、奥が請島

元の話では、この砂の状態は昔からほとんど変わらないという。学者がその理由を調べに来たこともあるらしい。

サンゴの石垣

与路島の各民家は沖縄の島の集落によくみられるように 1.5mほどの高さのサンゴの石垣で囲われている。台風の来襲に備えて強風から家を守るためだ。

ところがこのサンゴ石の石垣にはたくさんの隙間があり、この隙間がハブの棲み家になっている。与路小学校PTAが立てた「ハブに注意」の看板がところどころにあった。このため石垣の至る所に2m以上はあると思われる長い「ハブ棒」が立てかけられている。ハブが出てきたらこの木の棒で叩くのだろう。

ハブが棲むサンゴの石垣は厄介だから、近年、ブロック塀に作り替えられた。ちなみに隣も請島も同様にほとんどの石垣がブロック塀に作り替えられている。しかし、先祖代々受け継がれてきた文化遺産ともいえるサンゴの石垣をもとに戻そうとの動きが起こり、再びブロック塀を撤去し、サンゴの石垣の再生が図られてきた。つまりハブによる危険性よりも歴史的景観が重視されたことになる。

こうした伝統回帰の運動を誰が主導したのかわからないが、「珊瑚石垣修復記念碑」によると、2009（平成 21）年度に朝日新聞文化財団からの助成金 300 万円が修復運動のスタートだったようだ。その後、2014（平成 26）年度までの間に「地域振興推進事業」や「特定離島ふるさとおこし推進事業」などを活用して、サンゴの石垣が再生された。この間に投入された事業費は約 1,362 万円、再生した総延長は 1,117mに及ぶ。そしてほぼ元通りにサンゴ石の石垣が再生した。そしてこの石垣を有する集落の景観は国土交通省の「島の宝百景」に指定されたのだ。

文化遺産は復活したが、人が住む家は著しく減り、今後とも急速に減ることは避けられない状況になっている。世帯数は往時の 1/5 ほどに減っているから、家屋が撤去されて土台だけが残る敷地、あるいは草木で覆われた廃屋なども散見される。また集落内には精米所の後や豚小屋の跡もいくつも見られた。

人が住んでいて初めて文化遺産は引き継がれるわけだが、肝心の集落を維持する経済的対策がなければ、せっかくの島の宝も消え去る運命にあらう。



サンゴの石垣とハブ棒（左）、珊瑚石垣修復記念碑（右）

与路小中学校

集落と農地の間に、瀬戸内町立与路小中学校がある。現在の在校生は小学生5人、中学生2人で、このうちの小学生4人が島外からの留学生である。留学生の全員は化粧品会社ノエビアが里親となる「海の子留学」の児童たちだ。ノエビアは2014（平成26）年10月よりCSR活動の一環として与路島において海の子留学を始め、今年の4月より第8期がスタートしている。

留学生は近くのノエビア与路グリーンハウスに住み、学校に通っている。今年の4名は全員女子で、出身地は東京都2人、茨城県1人、大阪府1人という内訳だ。里親の夫妻にも子供がいて、この児童を含めて5名なので、在来島民の児童は実質的にいないことになる。なお中学生2人は島の出身である。

鹿児島県の離島では小中学校を存続させるために島外からの留学生の受け入れに積極的であるが、民間企業が里親になるケースは珍しい。ノエビアは南大東島などの辺鄙な島に研究所やら別荘を所有しており、この会社のオーナーは島に特別な関心があるようだ。与路島には30年ほど前に進出し、島の北部の山の中にも別荘（社員寮？）を所有している。

里親（ノエビア）への委託料（居住、食費等）は月額7万円で、このうち瀬戸内町が5万円を補助しているので、実親の負担は2万円である。その他の実費は実親が負担する。

教員は8人で、学校の近くにある教員宿舎に住む。教員と里親家族（3人）も島の人口に含まれるので、在来島民は70人ちょっとということになるだろう。

この日は日曜日だったので子供たちの姿を見ることはできなかった。小学校の裏手に古仁屋与路会（古仁屋在住の与路島の出身者の集まり）が創立60周年を記念して建てた大アムシャレの碑が置かれていた。大アムシャレというのは女神宮（親ノロ）のことで島の豪族（津止家）の娘が琉球王府から任命された。この大アムシャレが姪を伴った王府に参内した折、姪の容姿に目を付けた島のノロたちが王府への妃として進上するよう所望したが大アムシャレは固く断わり続け、帰りの船の中で姪のお茶に毒が盛られて死ぬと、大アムシエレは姪の死体を抱いて入水自殺したという。島民は海岸からナバ石を運んでこの地に墓をたてて葬った、という主旨のことが書かれていた。



与路小中学校（左）、島外からの留学生が住むノエビア与路グリーンハウス（右）

土地改良された農地

集落の背後に三面張りの川が流れ、山裾にかけてかなり広い農地が広がる。平成年代に入

って進められた土地基盤整備事業によって基盤の目のように区画され、用水路も整備されている。この事業によって水田は畑に代わり、現在は一面牧草地になっている。

与路島にもイノシシが生息しているようで、農地には柵が張られ、人家の入口にはイノシシが入って来られないようにネットが設置されている。

「与路島誌 ふるさとの今昔」によると、与路島の耕地面積は70町歩（70ha）で1戸平均は3反9畝（3,900㎡）と瀬戸内町の耕作面積（平均3反3畝）を上回っていた。このうち水田面積は22町歩（22ha）で1戸平均1反2畝（1,200㎡）であり、やはり町平均を上回っていた。

町村合併の1956（昭和31）年当時の与路島の耕作面積は618反（61.8ha）で田が175反、畑が443反という内訳で、鎮西村の集落別耕地面積の中でも最も多かった。田の大部分は集落背後にあった。小さな島にもかかわらず田の面積が大きいことが、往時に1,000人以上の人口を養えた要因だったのだろう。ただ田の大半は湿田で、牛馬を使用することはできず、耕起はもっぱら人力で行われていたため、非効率であり労力がかかった。もともと1期作であったが、1937（昭和12）年ごろに早生品種が開発されて2期作が普及したという。

集落背後の平地は主として田として活用され、平地の背後の傾斜地は後述するサトウキビと甘藷、麦の3毛作が行われていた。与路島では甘藷のことを「ハヌス」と呼んだ。サトウキビ畑を耕起した後に甘藷を植えつけ、甘藷を収穫した後に麦を蒔き、その後にサトウキビを植えつけたという。また戦後の食糧難の時期には山林の焼畑耕作も行われ、ここでは甘藷や粟などがつくられた。

このように与路島の産業は歴史的に農業がメインであり、主農従漁を基本とする自給自足経済が営まれてきた。唯一の現金収入源が江戸時代からの換金作物であるサトウキビであった。

しかし、与路島の農業のうち後述するようにサトウキビは40年ほど前に終わり、米は減反政策で廃業に追い込まれ、養豚業は公害問題で挫折、現在の唯一の農業生産は子牛の繁殖に絞られている。牛の飼養には広大な牧草地を必要とするため、集落背後の農地はほぼ牧草地に置き換わっているのはこのためだ。



集落背後に広がる農地（左）、農地内を流れる三面張りの水路（右）

サトウキビ

与路島では島内の至る所から切替畑（焼畑）の跡が散見されることから、江戸時代からサ

トウキビは切替畑で作られていた。おそらく上述した3毛作で作られていたのだろう。

ただ薩摩藩の圧政に苦しんだ与路島では、明治政府が黒糖の増産を督励するも江戸時代の圧政が身に染みていた農家はこれに応じなかったという。

鹿児島県はサトウキビの品種改良、技術者の要請、製糖機械の改良などを通じて積極的に指導督励したことから明治末期ごろから黒糖生産は奄美の一大産業として位置づけられるようになる。1935（昭和10）年ごろには与路島にも製糖組合が組織され、主要な換金作物になった。戦争中は生産が一時低迷するが、祖国復帰後は国の甘味資源保護政策のもとで再び栽培が盛んになった。

1956（昭和31）年当時の鎮西村における集落別のサトウキビ作付面積は、与路島が1,882 aで最も多く、生産量は152,296 kgで加計呂麻島の諸鈍（212,186 kg）に次いで多かった。そして与路島でも個人経営の小型圧搾機が数ヶ所にできた。

1964（昭和39）年に古仁屋に拓南製糖工場ができると、与路島のサトウキビは船で古仁屋まで運ばれて加工された。ただ瀬戸内町内各地から船で原料を運搬するのはきわめて効率が悪く、開業8年目の1971（昭和46）年には閉鎖されてしまった。その後、島内に残っていた小規模な加工場で黒糖を生産する時代が続く。

黒糖生産は1985（昭和60）年ごろまで続けられたが、その後サトウキビの生産は終焉を迎えた。

発達しなかった漁業

四方を海に囲まれているにもかかわらず、与路島では歴史的に漁業は発達せず、農業を主業とし、漁業は副業的であった。このことを物語るように島の港は漁港ではなく、地方港湾である。

与路島には沖縄県の久高島や本島の糸満から遠征し、追い込み網でズメダイなどを獲り、米と物々交換する漁師もやってきたようだが、与路島では漁業をする人を蔑視するような風潮がみられたという。

周辺の島々は周囲を海に囲まれていたから水産物は自給できた。したがって魚を獲っても売るマーケットがなかったことも漁業が発達しなかった理由と考えられる。さらにカツオ漁業などの比較的大きな規模の漁業を展開するには島に資本力もなかった。



与路島の港湾（左）、港内に係留されている漁船はわずか（右）

港には漁船1隻、船外機2隻が係留され、漁船1隻が陸上に引き揚げられていた。民宿

どりのご主人の話では、現在島で漁業をしている人は2人だけで、しかも漁獲物は出荷せず、自家用だという。漁業を営む人は古仁屋漁協に所属している。

タカバル

集落と農地の背後は標高200m前後の山で囲まれている。最も高いところが南部の大勝山の297mである。小中学校の裏手から背後の山に登る道があり、道路標識にはタカバル（高原）と書かれていた。この急坂を登る。周辺にはハゼの木とソテツ、月桃が目立つ。ハゼはかぶれるので要注意、ソテツの実には救荒食、月桃はサトウキビを束ねるのに使ったのだろう。

同宿の世利さんはバイクでこの坂を登って行ったから楽だったにちがいない。蒸し暑い中、高齢者には堪える坂で、喘ぎながら登ることになる。

やがてスケナダ方面へ左折する道が現れたが、さらに進むと、タカバルと砲台跡への道の分岐にさしかかった。タカバルはかなり長い坂を下った先にあり、夕日が美しいらしい。少し下りかけたがかなり長い道を歩かなければならず、帰りの登りのことを考えると、行き気になれなかった。途中で引き返し砲台跡の方へ歩を進める。

しばらくして眼下にタカバルの栈橋が見えてきた。人はほとんど来ないが、与路島の裏港に位置づけられている。かつて焼畑耕作が行われていた頃は、島の反対側にも作業小屋があり、収穫物を山越えの道を運ぶよりも船で運ぶ方が便利だったから栈橋がつくられたのだろう。さらに登るが、砲台跡への道はわからず、途中で引き返した。大東亜戦争当時につくられた砲台であるが、宿で聞いたところでは草木に覆われ、現在は行くことができないとのことだった。

Uターンして最初の分岐を右折しスケナダ方面に向かう。舗装された道をしばらく歩くと、牧場跡のような草地で覆われた場所が現れた。その先に山を平坦に削った広場があったが、廃車になった車が5～6台捨てられていた。崖の赤土がむき出しになっている。山を迂回して農地にできる道があるはずだが、途中まで行ったところで松の幼木が道路上まで生えており、車が通った跡もないので、先に行くのを諦め、引き返した。

上半身は汗でびしょ濡れになった。いったん民宿みどりに戻り、シャワーを浴びて、休憩する。



タカバルの栈橋（左）、切り拓かれた空き地に放置されている自動車（右）

牛飼い

民宿で一休みしてから、集落背後の農地の奥まったところにある牛舎を見に行った。相当疲れていたもので、民宿の自転車を借りようと申し入れたが、パンクする恐れがありその場合は古仁屋まで修理にもっていかねばならないと女将が言うので、諦めて歩くことにする。

与路島における牛飼いの歴史は古い。サトウキビを絞って黒糖を作る際に牛の労力が使われ、また堆肥（牛の糞）を得るために牛が飼われた。サトウキビがダメになり、米がダメになり、牛の繁殖だけが残された唯一の現金収入源となったのである。

与路島で牛を飼っているのは、「民宿みどり」の他に3経営体あり、そのうち2経営体が在来島民、1経営体が20年ほど前にIターンして来た看護師の人だという。民宿みどり以外の経営体の牛舎は集落から遠く離れた山裾に置かれている。集落に近いと牛の臭いが苦情のもととなるからだろう。

農地にサトウキビは全く残っていない。一部家庭菜園ほどの野菜畑はあるが、大部分は牧草地になっている。

牛舎は、農地の奥の北側、中央部、さらに南側の3ヶ所に分かれており、堰堤下の南側の牛舎が最も規模が大きい。ここは43頭を飼養し、年間24~25頭の子牛を出荷しているようだ。経営者は50歳代で、娘が手伝っているという。中央の牛舎はIターンの人の手によるもので15頭ほどを飼養しているようだ。残念ながら現場で話を聞くことができなかったため、「民宿みどり」の情報である。

生産した子牛は町営定期船「せとなみ」に乗せて出荷する。大島の北部・奄美市笠利町で2ヶ月に1回の頻度で開催されるセリ市に出荷している。最近の相場は1頭あたり70万円前後らしい。

牛舎から集落に戻る途中にヤギが飼われていた。この地方ではヤギは食用にされるので、出荷用かもしれない。



最も飼養頭数の多い堰堤下の牛舎（左）、牧草地で飼われているヤギ（右）

サガリバナ

「民宿みどり」の入口に小さな水路がある。その脇にサガリバナの木があった。女将の話では夜咲く花だという。一度咲くと、一夜限りで散るらしい。何とも幻想的だ。昨夜咲いたと思われる花が水路にたくさん落ちていた。この花の名前を聞くのも初めてなら、現物を見

るのも初めてであった。

ところが、この花の並木が島にあるという。休憩してから再び農地に繰り出し、サガリバナロードに行った。

サガリバナは奄美大島以南に分布する常緑小高木で、マングローブから上流の河川湿地帯に生える。7～8月が開花期で、夜に咲き、朝になると散る。与路島では水田の境界用として広く植えられていたが、基盤整備事業ですっかり姿を消してしまった。サガリバナロードのサガリバナは防風林として植えられていたもので、樹齢は150年を越えるらしい。この花を観光資源にしようと2015年に遊歩道が整備され、ライトアップされるようになった。



サガリバナロード（左）、夜に開花するサガリバナ（右）

民宿みどり

瀬戸内町の観光パンフレットによると、与路島には「民宿みどり」の他に「津留」「マンディカシロヴェラ」という2軒の民宿がある。「民宿みどり」は島の集落の最も北側に位置する。

部屋は2部屋。冷房のある部屋に案内された。ただしクーラーは有料で2時間に1回100円を投入する必要がある。

民宿は芳さんという珍しい姓で、1997（平成9）年にお祖父さんが亡くなり、部屋に余裕ができたことから民宿を始めたという。女将さんは1947（昭和25）年生まれの寅年で、1973（昭和48）年に島外から嫁いできた。当時の島の人口は480人だったというから、島は今よりもはるかに活気にあふれていたことだろう。

ご主人は温厚な方だが、少し耳が遠い。鹿児島市内で働いていたこともあり、島に戻ってから豚を飼った。現在は牛を3頭飼い、子牛を出荷している。また簡易水道のメーター検針や定期船のロープとりの仕事も兼業している。

息子は加計呂麻島を拠点に海上タクシーを営んでおり、徳之島方面にも出かけている。住まいは加計呂麻島にあり、一緒に住んでいない。海上タクシーのかたわら、釣りを営んでいるようで後述するようにこの日の夕食にも息子が獲ってきた魚が並んだ。

芳家では、以前、サトウキビを栽培し、自ら黒糖の製造を1976（昭和51）年まで行っていた。当時の釜や機械類が裏の納屋に残されている。黒糖はサトウキビの絞り汁に石灰を加えて煮詰めるが、加える石灰の量の調整が難しく、リトマス試験紙のようなもので、チェックしながら加えていたという。その後、養豚を始めたが臭気などの公害問題でやめ、お祖父

さんの代から牛飼いに変わる。昭和 60 年代のことである。女将さんは島の小学校で給食を作っていた。

民宿は新型コロナの影響で長いこと客を受け入れていなかった。島外から新型コロナウイルスが持ち込まれるのではないかとの島民の危惧から民宿の営業を自粛せざるを得なかったのである。

家の横は牧草地になっており、その片隅にはバナナの木が植わり、収穫まじかのバナナが実り、またパイナップルの木もある。刈り取った草は干して、牛に与えるが、子牛は濃厚飼料が必要なようで、輸入品が使われている。

この日の夕食は、シビの刺身、シイラの照り焼き、マガキガイ、ゴーヤの和え物、ソーキと竹輪・大根の煮物、豚カツ（ブロッコリー、トマト、キャベツ添え）であった。シビとシイラは息子が獲ってきたもの、マガキガイは女将が浜にでて採ってきたものだった。漁業が盛んではないから水産物は諦めていたのだが、意外にも満足のいく夕食であった。この宿にはビールが置いておらず、発泡酒の缶を 2 本と「あけぼの」という大島の黒糖焼酎を飲む。



民宿みどり（左）、民宿みどりの夕食（右）

日没を過ぎ、世利さんが戻ってきた。バイクで山の背後を廻り、ノエビアの別荘まで行って来たとのこと。タカバルで夕日が沈むのを見てきたようだ。この日は参議院選挙の日で、テレビからは開票速報が流れていた。

令和 4 年 7 月 10 日

朝食前に民宿の裏手にあるノエビアのグリーンハウスを見に行く。さらに民宿の黒糖加工場の跡と牛小屋を見学する。親牛 3 頭と子牛 1 頭がいた。

朝食は、飯、みそ汁、卵焼き漬物にランチョンミートが付いた。ただしランチョンミートは食べず。昨日のソーキ煮といい、ランチョンミートと云い、この与路島には沖縄の食文化が色濃く残っている。

港まで歩き、8 時発の「せとなみ」に乗り、次の訪問地である請島の請阿室に向かう。若い世利さんはそのまま古仁屋に出て、千葉の自宅に戻るようだ。

【文献】

与路小学校創立 90 周年記念事業推進委員会（1968）：与路島誌、ふるさとの今昔。

屋崎一（2002）：与路島誌（私家本）